

# 主観的社会経済的地位が援助意図に及ぼす影響

## —社会経済的地位が高い個人の方が高い援助意図を持つ場合—

竹部 成崇 (一橋大学 大学院社会学研究科, sd141013@g.hit-u.ac.jp)

村田 光二 (一橋大学 大学院社会学研究科, k.murata@r.hit-u.ac.jp)

The influence of subjective socioeconomic status on helping intention: The case in which higher socioeconomic status individuals are more willing to help

Masataka Takebe (Graduate School of Social Sciences, Hitotsubashi University, Japan)

Koji Murata (Graduate School of Social Sciences, Hitotsubashi University, Japan)

### Abstract

Prior research suggests that higher socioeconomic status (SES) individuals help others less than lower SES individuals due to the lack of empathic concern. This is thought to be because higher SES individuals are less likely to pay attention to others and, as a result, less likely to perceive their emotions accurately. Then, it is possible that when the distress of others is clear, higher SES individuals can perceive it and show the same level of empathic concern and intention to help as lower SES individuals. To test this possibility, an experiment was conducted. First, subjective SES of the participants was manipulated to create higher/lower SES conditions by comparing themselves with lower/higher SES individuals. Participants then listened to a tape in which an inpatient expressed either clear/ambiguous distress. After that, they reported their intention to help her or other inpatients, perceived distress, and empathic concern. Contrary to our prediction, only the main effect of the clarity of distress was significant both on perceived distress and empathic concern. Additionally, an unexpected interaction was significant; while there was no effect of the manipulation of subjective SES when they heard ambiguous distress, participants in the higher SES condition were more willing to do volunteer work than those in the lower SES condition when they heard clear distress. There were no differences between the two SES conditions in overall intention to help and intention to do the indirect help such as donation whether they heard clear/ambiguous distress. These results can be explained by the possibilities that the manipulation of distress might have served as the level of distress, which resulted in one's overestimation of the difficulty of volunteer work, and that increased sense of control among participants in the higher SES condition assured them that they could do the volunteer work.

### Key words

socioeconomic status, intention to help, distress of a sufferer, sense of control, manipulation of socioeconomic status

### 1. 目的

社会経済的に恵まれていない者と恵まれている者では、どちらの方が他者を援助するだろうか。直観的には、恵まれていない者は自身のことで手いっぱい、他者のことを顧みる余裕がないように思われるかもしれない。このような直観に反して Piff, Kraus, Côté, Cheng, & Keltner (2010) は、恵まれていないの方が恵まれている者より他者を助ける傾向があることを示した。このような傾向はなぜ生じ、どのような場合になくなるのだろうか。本研究では、どのような場合に社会経済的地位が高い個人も低い個人と同程度に他者を援助しようと思うのかを、実験的に検討する。

#### 1.1 社会経済的地位と援助行動

社会経済的地位とは望ましい資源へアクセスできる程度を表すものであり、収入・学歴・職業的地位のいずれか、あるいはいくつかを組み合わせることで指標化されるこ

とが多い (Oakes & Rossi, 2003)。また、人々はこういった社会経済的地位の構成要素を周囲の他者と比較することで自身の社会経済的地位についての主観的な感覚を形成しており、この主観的社会経済的地位を社会経済的地位の指標の1つとして用いる研究もある (e.g., Adler, Epel, Castellazzo, & Ickovics, 2000)。

社会経済的地位が高い個人は低い個人と比較して様々な資源を多く保有しており、他者に依存する必要がないため、相互独立的である (レビューとして Kraus, Piff, Mendoza-Denton, Rheinschmidt, & Keltner, 2012)。そのため、社会経済的地位が高い個人は他者への注意が低い場合があると考えられる。実際に Kraus & Keltner (2009) では、社会経済的地位が高い個人は低い個人と比較して、初対面の人との相互作用において、笑顔・注視・うなずきといった他者への関心を示す行動が少なく、手遊びやいたづら書きといった他者への注意の欠如を示す行動が多いことが示されている。

このような傾向は、他者の感情状態の把握や、苦境にいる他者への感情的反応にも影響を及ぼす。例えば Kraus, Côté, & Keltner (2010) は、社会経済的地位が高い個人の方が低い個人より、他者の感情推論が正確でないことを

示している。また Stellar, Manzo, Kraus, & Keltner (2012) は、社会経済的地位が高い個人の方が苦痛を感じている他者に対して共感的配慮を感じにくいこと、この傾向は知覚された他者の苦痛の強さが媒介することを示している。

こうした知見から、社会経済的地位が高い個人の方が低い個人より、他者を援助しない可能性が考えられる。実際に Piff et al. (2010) では、社会経済的地位が高い個人の方が、苦痛を表すサインを示す実験パートナーを援助しなかったことが示されている。ただしこの傾向は、事前に共感的配慮を喚起させる映像を視聴させることで消失することも示されている。ここから、社会経済的地位が高い個人は共感的配慮が喚起しにくいために、他者を援助しない傾向があることが示唆される。

### 1.2 苦痛の明確さの調整効果

以上の知見から、社会経済的地位が高い個人は他者への注意や関心が欠如しているため、苦境にいる他者の苦痛を知覚しにくく、結果として共感的配慮を感じにくく、援助行動を生起させにくいと考えられる。

もしそうであるならば、被援助者の苦痛が明確な場合は、社会経済的地位が高い個人でもその苦痛を知覚できるため、社会経済的地位が低い個人と同程度の共感的配慮および援助意図を持つことが考えられる。Piff et al. (2010) において苦痛を表すサインを示していた実験パートナーは実際には実験協力者であったが、この実験協力者が示す苦痛の程度は予備調査において7件法(1.全く感じていない～7.とても強く感じている)で平均4.52 ( $SD = 0.93$ )であったと報告されており、苦痛はそれほど明確でなかったことが示唆される。ここから、Piff et al. (2010) において社会経済的地位が高い個人の方が実験パートナーに対して援助しなかったのは、その苦痛が不明確であったがゆえに共感的配慮が喚起しなかったためであると考えられる。

### 1.3 本研究の概要

以上の議論から、本研究では、社会経済的地位と苦痛の明確さが援助意図に及ぼす影響を検討する。苦痛が不明確な場合は、高地位の参加者より低地位の参加者の方が苦痛を強く知覚し、強い共感的配慮を感じ、高い援助意図を持つことが予測される。他方、苦痛が明確な場合は、高地位の参加者も低地位の参加者と同程度の苦痛を知覚し、同程度の共感的配慮を感じ、同程度の援助意図を持つことが予測される。

なお、本研究では先行研究(e.g., Kraus et al., 2010; Piff et al., 2010)を参考に、主観的な社会経済的地位を実験的に操作する。具体的には、高地位条件の参加者には社会経済的地位が低い人々と自身の生活の相違点を記述させ、自身の高い地位を顕現化させる。他方、低地位条件の参加者には社会経済的地位が高い人々と自身の生活の相違点を記述させ、自身の低い地位を顕現化させる。このように社会経済的地位を操作するのは、社会経済的地位は統制が困難な他の様々な要因と交絡する可能性があるた

め、また、社会経済的地位から援助意図への因果的な影響を検討するためである。

## 2. 方法

### 2.1 参加者と実験計画

都内国立大学の学生60名(女性31名、男性29名)が実験に参加した。平均年齢は19.22歳( $SD = 0.97$ )であった。参加者は2(主観的社会経済的地位:高地位/低地位)×2(被援助者の苦痛の明確さ:明確/不明確)の4条件の1つに無作為に配置された。

### 2.2 手続き

1セッションにつき、2～3名の参加者が実験に参加した。参加者は距離の離れた各テーブルで個別に課題を行った。実験では「異なるタイプの想像力の関連性の検討」というカバーストーリーの下、「異なる環境にいる人々への想像力を測る課題」において主観的社会経済的地位の操作を、「音声情報から話し手について想像する課題」において被援助者の苦痛の明確さの操作および援助意図の測定を行った。その後、事後質問として、測定変数に影響しうる個人差の測定などを行った。最後にディブリーフィングを行って、実験を終了した。

### 2.3 主観的社会経済的地位の操作

参加者はまず12段の梯子を呈示され、この梯子は日本の人々が社会でどこに位置しているかを表していると考えてほしいと説明された。

その後、高地位条件の参加者は社会経済的地位の低い人々と自身の生活の相違点を、低地位条件の参加者は社会経済的地位の高い人々と自身の生活の相違点を、10分間記述した。その際、高地位条件の参加者には社会経済的地位の低い人々のイメージとしてビニールシートで作ったホームレスの人の住まいが写った写真を、低地位条件の参加者には社会経済的地位の高い人々のイメージとして都心の夜景が望める広々とした高級タワーマンションの部屋の写真を呈示した。

10分間の記述の後、参加者は日本社会を表す12段の梯子において自分はどこに位置すると思うかを評定した。

### 2.4 苦痛の明確さの操作および援助意図の測定

参加者はまず、近年、病院に長期入院している患者の孤独が問題となっており、彼らを支援するNPOがボランティアを募るために、長期入院している患者の声を集めたCDを作成していると説明された。次に、そのCDの中のある患者さんの話を聞いてもらおうと教示され、ヘッドホンを使用して音声を聞いた。その際に、話し手について想像しながら聞くよう教示された。

音声は実際には女性の実験協力者に依頼し作成されたもので、条件によって異なる2種類の音声が用意されていた。どちらも入院生活の単調さや孤独感を訴える内容のものであったが、苦痛明確条件の参加者に用意された音声は、かなり沈んだトーンで話されており、強い孤独

を伝える感情的な表現 (e.g., 「入院生活はやっぱりかなり孤独」「同じ生活の繰り返しという感じで、結構悲しくなるときもあります」) が用いられていたのに対し、苦痛不明確条件の参加者に用意された音声は、相対的に暗くないトーンで話されており、強い感情的な表現は用いられずに事実のみが伝えられていた。苦痛明確条件の音声は1分32秒、苦痛不明確条件の音声は1分16秒であった。話される内容は文字にして約7割が同一であった。

音声を聞いた後、参加者は質問紙へ回答した。ここではまず、援助意図に関する質問がなされた。主たる援助意図として、実際にボランティアに行く意図が尋ねられた。具体的には、NPOに実際に話し手へのボランティアをお願いされた場合に行く確率(1.絶対に行かない～9.必ず行く)、病院で長期入院中の患者へのボランティアに参加したいと思う程度(1.全く思わない～9.とても強く思う)の2項目が各9件法で尋ねられた。ただし、ボランティアに行くという意思決定には、ボランティアの難易度の認知なども影響する可能性がある。そこで補足的に、全般的な援助意図と間接的な援助に関する意図も尋ねられた。具体的には、全般的な援助意図として、現実に行けるかどうかは別として、話し手のためにボランティア(病院に行って話し相手になったりする)に行きたいと思った程度が、9件法で尋ねられた(1.全く思わなかった～9.とても強く思った)。間接的な援助に関する意図としては、NPOに寄付しても良い程度(1口500円として何口寄付するかを自由記述)、NPOにCD配布を頼まれた場合に手伝う確率(1.絶対に手伝わない～9.必ず手伝う)、SNSでの活動のシェアを頼まれた場合にシェアする確率(1.絶対にシェアしない～9.必ずシェアする)の3項目が尋ねられた。

続いて、話し手への共感的配慮、および知覚された話し手の苦痛に関する質問がなされた。共感的配慮としては、音声を聞いているとき、同情・かわいそう・思いやり・気の毒だ、という感情をどの程度感じたかが、各9件法で尋ねられた(1.全く感じなかった～9.とても強く感じた)。知覚された話し手の苦痛としては、話し手が入院中、悲しみ・寂しさ・沈んだ気持ち、をどの程度感じていると思ったかが、各9件法で尋ねられた(1.全く感じていない～9.とても感じている)。

## 2.5 個人差の測定

梯子における自身の位置の評定に影響しうる変数として、世帯年収と両親の学歴が測定された。世帯年収に関する質問の回答選択肢は(1)200万円未満(2)200～400万円(3)400～600万円(4)600～800万円(5)800～1000万円(6)1000～1200万円(7)1200～1500万円(8)1500万円以上(9)わからない、となっており、明確にわからない場合でもおおよそを回答するよう指示された。両親の学歴に関する質問の回答選択肢は(1)中学校(2)高校(3)短大/高専(4)大学(5)大学院、となっており、父親と母親それぞれについて尋ねられた。

援助意図に影響しうる変数として、自発的なボランティ

ア参加経験、自発的な寄付経験、および普段の生活でお金に困っている程度が測定された。自発的なボランティア参加経験については、その頻度が5件法で尋ねられた(1.したことがない～5.よくする)。自発的な寄付経験についても同様にその頻度が5件法で尋ねられ、その後、平均的な1回の寄付額が自由記述方式で尋ねられた。普段の生活でお金に困っている程度は5件法で尋ねられた(1.全く～5.非常に)。

## 3. 結果

### 3.1 分析対象者

主観的社会経済的地位の操作の教示に従わなかった3名を分析から除外した。その結果、分析対象者は57名(女性31名、男性26名、高地位/苦痛明確条件14名、高地位/苦痛不明確条件15名、低地位/苦痛明確条件14名、低地位/苦痛不明確条件14名)となった。平均年齢は19.21歳( $SD = 1.00$ )であった。

### 3.2 操作チェック

主観的社会経済的地位の操作チェックとして、梯子における自身の位置の評定について、世帯年収( $M = 4.57$ ,  $SD = 1.72$ )および親の学歴の単純加算平均( $r = .60$ ,  $p < .001$ ,  $M = 3.45$ ,  $SD = 0.76$ )を共変量とした、実験計画に基づく $2 \times 2$ の共分散分析を行った<sup>(1)</sup>(表1の1行目参照)。その結果、世帯年収の効果は有意であった一方( $F(1, 43) = 9.66$ ,  $p < .01$ )、親の学歴の効果は有意でなかった( $F(1, 43) = 0.07$ ,  $n.s.$ )。また、主観的社会経済的地位の主効果が有意で、高地位条件の参加者の方が( $M = 8.18$ ,  $SE = 0.27$ )低地位条件の参加者より( $M = 7.24$ ,  $SE = 0.27$ )、自分の位置を高く評定していた( $F(1, 43) = 5.91$ ,  $p < .05$ )。苦痛の明確さの主効果、および交互作用は有意でなかった( $F_s < 1.86$ ,  $n.s.$ )。よって、操作は成功していたと考えられる。

### 3.2 知覚された苦痛

話し手が入院中感じていると思った悲しみ・寂しさ・沈んだ気持ちの評定の単純加算平均( $\alpha = .79$ )について、 $2 \times 2$ の分散分析を行った(表1の2行目参照)。その結果、苦痛の明確さの主効果が有意で、苦痛明確条件の参加者の方が( $M = 7.85$ ,  $SE = 0.21$ )苦痛不明確条件の参加者より( $M = 6.37$ ,  $SE = 0.20$ )、話し手の苦痛を強く知覚していた( $F(1, 53) = 25.82$ ,  $p < .001$ )。主観的社会経済的地位の主効果および交互作用は有意でなかった( $F_s < 2.20$ ,  $n.s.$ )。よって、仮説を支持する結果は得られなかった。

### 3.3 共感的配慮

音声を聞いているときに感じた、同情・かわいそう・思いやり・気の毒だ、という感情についての評定の単純加算平均( $\alpha = .79$ )について、同様の分散分析を行った(表1の3行目参照)。その結果、苦痛の明確さの主効果が有意で、苦痛明確条件の参加者の方が( $M = 6.59$ ,  $SE = 0.25$ )苦痛不明確条件の参加者より( $M = 4.83$ ,  $SE = 0.24$ )、共感的配慮を強く感じていた( $F(1, 53) = 26.00$ ,  $p < .001$ )。主

表 1：各変数の条件ごとの平均値および標準誤差

	苦痛明確条件		苦痛不明確条件	
	高地位条件	低地位条件	高地位条件	低地位条件
梯子における自身の位置	7.81 (0.41)	7.09 (0.39)	8.56 (0.36)	7.40 (0.39)
知覚された苦痛	7.67 (0.29)	8.02 (0.29)	6.62 (0.28)	6.12 (0.29)
共感的配慮	6.66 (0.35)	6.52 (0.35)	4.98 (0.34)	4.68 (0.35)
実際にボランティアに行く意図	6.13 (0.33)	4.87 (0.32)	5.26 (0.31)	5.11 (0.33)
全般的な援助意図	6.50 (0.49)	5.83 (0.48)	5.12 (0.46)	4.89 (0.49)
寄付意図	2.07 (0.23)	2.23 (0.23)	1.58 (0.22)	1.93 (0.23)
CD 配布・活動シェア意図	5.93 (0.54)	5.66 (0.57)	5.28 (0.55)	4.85 (0.54)

注：括弧内は標準誤差を表す。

観的社会経済的地位の主効果および交互作用は有意でなかった ( $F_s < 0.43, n.s.$ )。よって、仮説を支持する結果は得られなかった。

### 3.4 援助意図

知覚された苦痛および共感的配慮について仮説を支持する結果は得られなかったが、探索的に、援助意図について予定していた分析を行った。

まず、主たる援助意図である、実際にボランティアに行く意図の指標 2 項目の単純加算平均 ( $r = .42, p < .01$ ) について、ボランティア参加経験 ( $M = 1.72, SD = 0.92$ ) を共変量とした、 $2 \times 2$  の共分散分析を行った (表 1 の 4 行目参照)。その結果、ボランティア参加経験の効果が有意であった ( $F(1, 52) = 12.89, p < .001$ )。また、主観的社会経済的地位の主効果が有意であり、高地位条件の参加者の方が ( $M = 5.69, SE = 0.23$ ) 低地位条件の参加者より ( $M = 4.99, SE = 0.23$ )、実際にボランティアに行く意図が高かった ( $F(1, 52) = 4.64, p < .05$ )。さらに、交互作用が有意傾向であった ( $F(1, 52) = 3.04, p < .10$ )。単純主効果検定を行ったところ、苦痛明確条件において主観的社会経済的地位の単純主効果が有意で、高地位条件の参加者の方が ( $M = 6.13, SE = 0.33$ ) 低地位条件の参加者より ( $M = 4.87, SE = 0.32$ )、実際にボランティアに行く意図が高かった ( $F(1, 52) = 7.54, p < .01$ )。また、高地位条件において苦痛の明確さの単純主効果が有意傾向で、苦痛明確条件の参加者の方が ( $M = 6.13, SE = 0.33$ ) 苦痛不明確条件の参加者より ( $M = 5.26, SE = 0.31$ )、実際にボランティアに行く意図が高い傾向があった ( $F(1, 52) = 3.72, p < .10$ )。苦痛の明確さの主効果およびその他の単純主効果は有意ではなかった ( $F_s < 0.93, n.s.$ )。よって、援助意図についても仮説を支持する結果は得られなかった。しかし重要なことに、従来の知見 (Piff et al., 2010) とは反対に、高地位条件の参加者の方が低地位条件の参加者より援助意図が高かった。また、この傾向は苦痛明確条件に限られていた。このような結果が得られた原因について、考察において詳しく議論する。

続いて、補足的に測定した、全般的な援助意図および間接的な援助に関する意図についても、探索的に分析を

行った。まず、全般的な援助意図について、ボランティア参加経験を共変量とした、 $2 \times 2$  の共分散分析を行った (表 1 の 5 行目参照)。その結果、ボランティア参加経験の効果が有意であった ( $F(1, 52) = 4.84, p < .05$ )。また、苦痛の明確さの主効果が有意で、苦痛明確条件の参加者の方が ( $M = 6.17, SE = 0.34$ ) 苦痛不明確条件の参加者より ( $M = 5.01, SE = 0.34$ )、全般的な援助意図が高かった ( $F(1, 52) = 5.66, p < .05$ )。主観的社会経済的地位の主効果および交互作用は有意でなかった ( $F_s < 0.89, n.s.$ )。

間接的な援助に関する意図については、寄付意図は CD 配布意図 ( $r = -.03, n.s.$ ) および SNS 上での活動シェア意図 ( $r = .15, n.s.$ ) と有意な相関がなかったため、別々に分析を行った。寄付意図についてはまず、平均 +3SD を超える値を記入した者が 1 名いたため、正規分布に近くなるように、0 口を 0、1 口を 1、2 口を 2、3 ~ 6 口を 3、7 口以上を 4 と、値を変換した。次に、この指標について、寄付経験のない者は 0 円とした平均的な 1 回の寄付額 ( $M = 225.09, SD = 309.83$ ) および普段の生活でお金に困っている程度 ( $M = 2.12, SD = 1.07$ ) を共変量とした、 $2 \times 2$  の共分散分析を行った (表 1 の 6 行目参照)。その結果、平均的な 1 回の寄付額の効果および普段の生活でお金に困っている程度の効果は、有意でなかった ( $F_s < 2.55, n.s.$ )。苦痛の明確さの主効果は有意傾向で、苦痛明確条件の参加者の方が ( $M = 2.15, SE = 0.16$ ) 苦痛不明確条件の参加者より ( $M = 1.76, SE = 0.16$ )、多くの金額を寄付する傾向があった ( $F(1, 51) = 2.99, p < .10$ )。主観的社会経済的地位の主効果および交互作用は有意でなかった ( $F_s < 1.22, n.s.$ )。

次に、CD 配布意図と SNS 上での活動シェア意図の単純加算平均 ( $r = .36, p < .01$ ) について、ボランティア参加経験を共変量とした、 $2 \times 2$  の共分散分析を行った<sup>(2)</sup> (表 1 の 7 行目参照)。その結果、ボランティア参加経験の効果は有意でなかった ( $F(1, 48) = 0.36, n.s.$ )。また、主観的社会経済的地位の主効果、苦痛の明確さの主効果、および交互作用も有意でなかった ( $F_s < 1.75, n.s.$ )。

以上のように、補足的に測定した援助意図についても、仮説を支持する結果は得られなかった。これらについては概ね、知覚された苦痛および共感的配慮についての結果と同様で、苦痛の明確さの主効果のみが見られた。実

際にボランティアに行く意図についての分析で得られた、高地位条件の参加者の方が低地位条件の参加者より援助意図が高いという、従来の知見 (Piff et al., 2010) と反対の結果は得られなかった。

#### 4. 考察

本研究は、主観的社会経済的地位が援助意図に及ぼす影響について、苦痛の明確さに着目して検討を行った。苦痛が不明確な場合は、高地位条件の参加者より低地位条件の参加者の方が苦痛を強く知覚し、強い共感的配慮を感じ、高い援助意図を持つことが予測された。他方、苦痛が明確な場合は、高地位条件の参加者も低地位条件の参加者と同程度の苦痛を知覚し、同程度の共感的配慮を感じ、同程度の援助意図を持つことが予測された。

しかし、これらの仮説を支持する結果は得られなかった。知覚された苦痛および共感的配慮については苦痛の明確さの主効果のみが有意で、苦痛明確条件の方が不明確条件より知覚された苦痛および共感的配慮が強かった。

援助意図については、苦痛明確条件において Piff et al. (2010) の知見とは反対に、高地位条件の方が低地位条件より実際にボランティアに行く意図が高かった。苦痛不明確条件においては、高地位条件と低地位条件の間に差は見られなかった。また、全般的な援助意図および寄付意図については苦痛の明確さの主効果のみが有意あるいは有意傾向で、苦痛明確条件の方が不明確条件より全般的な援助意図および寄付意図が高かった。寄付ではない間接的な援助意図 (i.e., CD 配布意図と SNS 上での活動シェア意図) については、すべての効果が有意でなかった。

##### 4.1 結果の考察

仮説に反し、苦痛不明確条件においても、主観的社会経済的地位の操作は知覚された苦痛および共感的配慮に影響を及ぼしていなかった。この原因は音声を聞く際の教示にあった可能性がある。本研究ではカバーストーリーとの整合性を保つため、話し手について想像しながら音声聞くよう教示した。しかしこれまでの研究において、このような教示は対象者の苦痛の知覚を強めること、また、共感的配慮を強く喚起させることが示唆されている (レビューとして Batson, 2011)。ここから、話し手についてよく想像しながら音声聞いたために、苦痛不明確条件においても、知覚された苦痛および共感的配慮について高地位条件と低地位条件の間に差が見られなかったことが考えられる。

これと、苦痛明確条件の方が不明確条件より知覚された苦痛および共感的配慮を高く報告したことを考慮すると、苦痛の明確さの操作は、結果として、苦痛の大きさの操作になっていたことが考えられる。

より重要なことに、苦痛明確条件においては Piff et al. (2010) の知見とは反対に、高地位条件の方が低地位条件より実際にボランティアに行く意図が高かった。高地位条件と低地位条件の間で知覚された苦痛および共感的配慮について差がなかったにも関わらず、なぜこのよ

うな結果が得られたのであろうか。

本研究で注目してきた共感的配慮は援助意図に影響を及ぼす1つの重要な要因であるが、援助意図に影響を及ぼす要因はこれだけではない。援助の生起過程に関する複数のモデルでは、援助の遂行可能性についての主観的な感覚も援助意図に影響を及ぼすことが主張されている (e.g., Latane & Darley, 1970; 高木, 1997)。

こうした観点から、個人が持つ全般的なコントロール感も援助意図に影響を及ぼすことが考えられる。コントロール感とは結果を自分自身がコントロールできる程度についての感覚であり、計画的行動理論において行動意図に影響を及ぼすとされている (Ajzen, 1991)。この理論で想定されているコントロール感はある特定の行動に対するコントロール感であるが、エージェンシー感覚あるいは全般的自己効力感のような、全般的なコントロール感も存在する (Lachman & Weaver, 1998; Sherer, Maddux, Mercandante, Prentice-Dunn, Jacobs, & Rogers, 1982)。近年の研究では、神概念のプライミング (Laurin, Kay, & Fitzsimons, 2012) や自由意志信念の否定 (Rigoni, Wilquin, Brass, & Burle, 2013) といった全般的なコントロール感を低下させる操作が、目標の遂行可能性を低く知覚させ、目標遂行に対する動機づけを低下させることが示唆されている。これと、共感的配慮が喚起した状態では援助の遂行が目標となっていること (Batson, 2011) を考慮すると、個人が持つ全般的なコントロール感は、共感的配慮が喚起した際の援助意図に影響を及ぼすことが示唆される。

社会経済的地位が高い個人は低い個人と比較して様々な資源を保有しており、結果を自分自身でコントロールできる割合が高いために、この全般的なコントロール感を高く知覚していると考えられる。実際に、社会経済的地位が高い個人ほど、自身の生活全般に対するコントロール感を高く知覚していることが示されている (e.g., Lachman & Weaver, 1998)。

これらから、社会経済的地位が高い個人と低い個人の間で同程度の共感的配慮が喚起した場合、高いコントロール感を持つ社会経済的地位が高い個人の方が、他者を援助する意図が高くなる可能性が考えられる。また、コントロール感が援助の遂行可能性の知覚を介して援助意図に影響を及ぼすと考えると、この傾向は特に援助が困難な場合において見られると考えられる。

本研究で得られた結果はこうした考えと一致している。まず、苦痛の明確さの操作は結果として苦痛の大きさの操作となっていたと考えられるため、実際に被援助者と対面するボランティアを行うことの困難さに影響を及ぼしていたことが考えられる。すなわち、被援助者の苦痛が大きい苦痛明確条件では、苦痛が小さい苦痛不明確条件より、実際にボランティアを行うことが困難であったことが考えられる。そのため、高地位条件と低地位条件の間で喚起している共感的配慮は同一であるにも関わらず、ボランティアを実際に行うことが困難な苦痛明確条件では、コントロール感が高い高地位条件の方が低地位条件よりボランティアの遂行可能性を高く知覚したため、

実際にボランティアに行く意図が高かったと考えられる。他方、ボランティアを行うことが困難でない苦痛不明確条件では、コントロール感が実際にボランティアに行く意図に影響しなかったため、高地位条件と低地位条件の間で差が見られなかったと考えられる。

この解釈は、全般的な援助意図および間接的な援助に関する意図において主観的社会経済的地位の操作の効果が見られなかったこととも整合的である。全般的な援助意図は実際に行くかどうかは考慮に入れないときのボランティア意図であるため、遂行可能性は考慮に入られていないと考えられる。また、間接的な援助は実際に被援助者と対面することを必要としないため、その困難さおよび遂行可能性の知覚は被援助者の苦痛の大きさに影響されないと考えられる。このように、これらの指標においては被援助者の苦痛の大きさと援助の遂行可能性の知覚が関連しないため、主観的社会経済的地位の操作の効果が見られなかったと考えられる。

#### 4.2 本研究の意義、課題、および今後の展望

従来の研究では、社会経済的地位が高い個人は苦境にいる他者に対して共感的配慮を感じにくいいため、援助行動を生起させにくいことが示唆されていた (Piff et al., 2010)。他方、社会経済的地位が高い個人の方が援助する可能性については議論されてこなかった。本研究は従来の知見とは反対に、社会経済的地位が高い個人の方が高い援助意図を持つ場合があることを示唆したという点において、一定の意義があるだろう。

しかし、実際にどのような影響過程が働き、社会経済的地位が高い個人の方が高い援助意図を持ったのかは明らかでない。結果の考察において、高い社会経済的地位に伴うコントロール感の高さが困難な援助に対しても遂行可能性を高く知覚させることで援助意図を高めるという可能性が議論されたが、本研究はこの可能性を直接的に支持する証拠を提供していない。今後の研究では、この可能性をより詳細に検証する必要があるだろう。

また、本研究では大学生を対象に社会経済的地位の実験的な操作を用いた検討を行ったが、この結果が日頃の社会経済的地位を用いた場合においても再現されるかは確実ではない。本研究で得られた知見の生態学的妥当性を確認するためにも、より多様な人々を対象に、日頃の社会経済的地位を用いた検討を行う必要があるだろう。

本研究の結果から、社会経済的地位と関連するコントロール感が援助行動に影響する可能性が示唆されたが、社会経済的環境と関連するその他の要因も援助行動に影響を及ぼす可能性がある。例えば、援助は他者からの地位や評判を上昇させる効果があり (Anderson & Kilduff, 2009)、地位が高い個人の方が低い個人より自身の地位や他者からの評判に気を配ることを考慮すると (e.g., Blader & Chen, 2012)、援助が他者から見られている場合には社会経済的地位が高い個人の方が低い個人より援助する可能性が考えられる。また、社会経済的地位と関連すると考えられる勢力感、保有する時間についての主観的感

覚に影響を及ぼすことが示唆されている (Moon & Chen, 2014)。これと、保有する時間についての感覚の変化がボランティア意図に影響を及ぼすことを考慮すると (Rudd, Vohs, & Aaker, 2012)、社会経済的地位は保有する時間についての主観的感覚を介してボランティア意図に影響を及ぼす場合がある可能性がある。さらに、貧困は金銭的な欠乏感と関連する。人は他者について推論する際に自身の感覚を基に推論することを考慮すると (Van Boven & Loewenstein, 2003)、貧しい人は金銭的な欠乏感が強いために、問題を抱えた人を見たときにその原因をお金の欠如に帰属する傾向が強く、結果として、より高い寄付意図を持つ場合があることが考えられる。社会経済的環境と援助行動の関係をより詳細に理解するには、今後の研究においてこれらの可能性を検討していくことも望まれる。

最後に、今後の研究ではアメリカと日本の文化的差異も考慮に入れて研究することが望まれる。本研究では Kraus et al. (2010) や Piff et al. (2010) を参考に主観的社会経済的地位の操作を行ったが、アメリカのように格差の大きさが明らかである国と日本のように明らかでない国では、同一の結果が確認されないことは自然かもしれない。また、寄付やボランティアが日常的に行われる文化に染まって育つアメリカの大学生とそうではない日本の大学生では、その操作が及ぼす影響は異なる可能性も考えられる。今後の研究ではこのような文化的差異にも注目し、アメリカで確認されている知見を日本において再現するのに適した手続きや、日本においてはアメリカと異なる形で社会経済的地位が人々の認知や行動に影響を及ぼす可能性を検討していくことが望まれる。

#### 注

- (1) 世帯年収について「わからない」と回答したためにこの分析から除外された者が8名いた。共変量を用いず、これらの参加者を含んで分析した場合でも結果は大きく変わらず、主観的社会経済的地位の主効果のみが有意であった。
- (2) SNS 上での活動シェア意図について回答がなかった4名(高地位/苦痛不明確条件2名、低地位/苦痛明確条件2名)はこの分析から除いた。

#### 引用文献

- Adler, N. E., Epel, E. S., Castellazzo, G., & Ickovics, J. R. (2000). Relationship of subjective and objective social status with psychological and physiological functioning: Preliminary data in healthy, White women. *Health Psychology, 19*(6), 586-592.
- Anderson, C., & Kilduff, G. J. (2009). The pursuit of status in social groups. *Current Directions in Psychological Science, 18*(5), 295-298.
- Ajzen, I. (1991). The theory of planned behavior. *Organizational Behavior and Human Decision Processes, 50*(2), 179-211.
- Batson, C. D. (2011). *Altruism in humans*. Oxford University

- Press (バトソン C. D. 菊池章夫・二宮克美 (訳) (2012). 利他性の間人学—実験社会心理学からの回答—. 新曜社).
- Blader, S. L., & Chen, Y. R. (2012). Differentiating the effects of status and power: A justice perspective. *Journal of Personality and Social Psychology*, 102(5), 994-1014.
- Kraus, M. W., Côté, S., & Keltner, D. (2010). Social class, contextualism, and empathic accuracy. *Psychological Science*, 21(11), 1716-1723.
- Kraus, M. W., & Keltner, D. (2009). Signs of socioeconomic status a thin-slicing approach. *Psychological Science*, 20(1), 99-106.
- Kraus, M. W., Piff, P. K., Mendoza-Denton, R., Rheinschmidt, M. L., & Keltner, D. (2012). Social class, solipsism, and contextualism: How the rich are different from the poor. *Psychological Review*, 119(3), 546-572.
- Lachman, M. E., & Weaver, S. L. (1998). The sense of control as a moderator of social class differences in health and well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74(3), 763-773.
- Latane B., & Darley J. M. (1970). *The Unresponsive Bystander: Why Doesn't He Help?* New York: Appleton-Century-Crofts.
- Laurin, K., Kay, A. C., & Fitzsimons, G. M. (2012). Divergent effects of activating thoughts of God on self-regulation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 102(1), 4-21.
- Moon, A., & Chen, S. (2014). The power to control time: Power influences how much time (you think) you have. *Journal of Experimental Social Psychology*, 54, 97-101.
- Oakes, J. M., & Rossi, P. H. (2003). The measurement of SES in health research: Current practice and steps toward a new approach. *Social Science & Medicine*, 56(4), 769-784.
- Piff, P. K., Kraus, M. W., Côté, S., Cheng, B. H., & Keltner, D. (2010). Having less, giving more: The influence of social class on prosocial behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 99(5), 771-784.
- Rudd, M., Vohs, K. D., & Aaker, J. (2012). Awe expands people's perception of time, alters decision making, and enhances well-being. *Psychological Science*, 23(10), 1130-1136.
- Rigoni, D., Wilquin, H., Brass, M., & Burle, B. (2013). When errors do not matter: Weakening belief in intentional control impairs cognitive reaction to errors. *Cognition*, 127(2), 264-269.
- Sherer, M., Maddux, J. E., Mercandante, B., Prentice-Dunn, S., Jacobs, B., & Rogers, R. W. (1982). The self-efficacy scale: Construction and validation. *Psychological Reports*, 51(2), 663-671.
- Stellar, J. E., Manzo, V. M., Kraus, M. W., & Keltner, D. (2012). Class and compassion: Socioeconomic factors predict responses to suffering. *Emotion*, 12(3), 449-459.
- 高木修 (1997). 援助行動の生起過程に関するモデルの提案. 関西大学社会学部紀要, 29(1), 1-21.
- Van Boven, L., & Loewenstein, G. (2003). Social projection of transient drive states. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 29(9), 1159-1168.

(受稿: 2016年6月22日 受理: 2016年7月25日)